Book Review

最近、読んだ本・・・・石井嘉昭

■ いい人ぶらずに生きてみよう／著：千玄室著

大正 12 年（1923 年）生まれの茶道界の長老、第 15 代裏千家の家元「鵬雲斎大宗匠」が今まで家元として片意地張って生きてきたが、これからは無理やり「いい人」ぶらずに、素直な自分と向きあう生き方をしよう。９０歳近くなった今「嘆かわしいこの国の現実に苦言を呈すべきだという義務感がわいてきた」「息子に家元を譲ったけれど自分にはやらなくてはならない事がある、それは日本文化の復興です。」との思いからこの本を書いた。氏は子供の頃から家元になるべく厳しい茶道の修行に明け暮れた。大学は東京に行こうと密かに思っていたがかなわず、同志社大学に入学する。大学３年の時（昭和 18 年）徴兵猶予が廃止され徴兵検査を受け、海軍第 14 期飛行予備学生となり飛行訓練を受ける。昭和 20 年３月に徳島の航空隊で特別攻撃隊に志願する。沖縄決戦に向けて飛び立つ戦友に茶を点て静かに見送った。「死なばもろとも」と誓った戦友が一人去り二人去り明日は我が身かとの思いの中で終戦を迎え、虚脱感にとらわれ京都に帰る。あるがままの自分を見つめなおそうと大徳寺で修行をし鵬雲斎玄秀宗興居士の号を授かる。日本の文化を学びたいとう進駐軍の兵士に今日庵で父親が茶を点てている姿を見て、茶室の中では勝った国も負けた国もない、身分の上下もない、そこで一碗の茶を前にしたときは人として対等であるというお茶の精神を見た。たくさんの犠牲の上に自分の命があるのだ。生かされている喜びを味あう。「アメリカ人にも茶の心を伝えてほしい。」という連合国司令官の勧めで、アメリカで茶の普及に努めハワイ大学で茶道を教える。その後「一盌からピースフルを」の理念を提唱し、国際的な視野に立ち茶道文化の普及と世界平和を願い数々の要職を歴任し今日の裏千家の隆盛の基礎を築く。

この国の未来のために、国の在り方や教育、家庭でのしつけなど身近な例を引きながら独自の理論を展開しています。

■ 発行元／集英社新書

■ Ａ５判 １８５頁＝７１４円（税込）

最近、読んだ本・・・・奈良利男

■ デフレの正体――経済は「人口の波」で動く／著：藻谷浩介

福田康夫総理大臣が誕生する１年ほど前、自民党は内部の委員会で 200 年住宅を法制化する検討を始めていた。福田康夫氏が委員長であったその委員会に、松村秀一東大教授が招聘をうけ参画されていた。

そのころ、先生にお目にかかった折に質問したことがある。「100 年後の日本の人口は、国立人口問題研究所が 3000 万人と推定していると教えていただきましたが、200 年後はどうなるのでしょうか」と。「4 人という推定があります」とのお答えであった。仰天した筆者は「委員会では 200 年住宅にだれが住むのかという話はでないのですか」と続けた。先生のお答は「その話は出ませんねー」とのことであった。

200 年住宅は「長期優良住宅」認定制度として法制化されたが、筆者は「長期優良住宅」に 200 年後だれが住むのか、あるいは日本人でないとすればどこの国の人なのか、と考えていた。そんな折、たまたま書店に平積みされていた本書を手にして、これは読んでみようと思った。この本は未解決の問題に応えてくれるように感じた。

読んでみて、はたして問題は解決した。日本の人口減少問題をはじめ、経済問題などさまざまな問題について、目の覚めるような明快な解説と処方箋を示している。

筆者が理解したところでは、すべての問題の根源は、日本の特異な人口構成にある。戦後のベビーブームはいわゆる団塊の世代を生み出した。この世代が子育てに懸命だったころ、みんなが住宅を建て、冷蔵庫や洗濯機やテレビや車を買い、子供を旅行に連れて行って、お金を使っていたから景気はよかった。

ところが、団塊の世代は 1990 年代に子育ても終え、しだいにお金を使わなくなってしまった。これが昨今の不景気の原因である。この世代はこれから続々とリタイアし、ますますお金を使わなくなる。これまでの延長線上の経済成長策では、人口構成が変えられるわけはなく、景気がよくなることはあり得ない。

著者は日本政策投資銀行参事役である。全国で累計 3000 回以上の講演経験を基に構成しており、講演調であるが読みやすい。的確な処方箋が示されている。諸賢もぜひ一読を。

■ 出版社／株式会社角川書店 (角川 ONE テーマ 21)

■ 新書版２７０頁＝７６０円 (税込)